

## 高橋浩一郎名誉会員のご逝去を悼む

日本気象学会名誉会員、第5代気象庁長官、(勲)日本気象協会前副会長であった高橋浩一郎先生は、肺炎のため去る8月21日に亡くなられた。享年78歳。先生は亡くなられるまで研究に情熱を注がれ、今年9月25日に開かれたシンポジウム「小氷期気候」にも論文発表を申し込まれておられた。まことに痛恨の極みである。

高橋先生は、故永田武先生や今井功先生など日本を代表する学者と大学は同級で、1936年に東京大学理学部を卒業された。卒業後ただちに、当時の中央気象台に入り、藤原咲平先生の指導下、予報の現場に配属された。このことが、嬉しかったらしく、藤原先生にひろわれて気象台に入ることが出来たとよく言われた。先生が総観気象学の路を歩まれたのは、藤原先生との出会いが大きな意味をもつものと思われる。

先生の処女論文は、かなり早く、学生時代には寺田寅彦先生の紹介で岩波の「科学」に“発展現象の数式化”を発表され、さらに、大学3年生の時、気象集誌に「気象要素にあらわれる外見的周期につきて」を投稿し、“寺田の法則”を論じた。生涯を通じて研究への情熱やアプローチの仕方に大きな影響を与えたのは、学生時代の寺田寅彦先生の御指導にあったとみられる。この頃から、先生は、理論より現象を統計的に観察し、全体像を記述することに興味を持たれたようだ。

寺田流の考え方は、先生独得の統計的自然観に発展し、「初冬に於ける極東亜細亜の天気変遷の動気候学的観察」(集誌1940)など、予報の現場から生まれた論文がつつぎと発表された。先生の研究や指導によって和田英夫、斉藤将一、根本順吉など数多くの優れた子弟が予報現場で育てられた。

研究分野は、天気予報論、動気候学、長期予報、気象統計、気象災害、地球環境などに分類される。中でも量的天気予報の研究は1944年に第1回技術院賞、48年に理学博士が東京大学から授与された。天気予報に気温、風速などの量的表現をつけ加えたことは、先生の独創的な仕事で、その後の予報業務の発展の基礎となった。

先生の論文や書籍の数は龍大であるが、1990年に喜寿の印として選出された科学論文集には、52篇の主論文が収められているが予報現場から生まれた論文数が多い。書籍だけでも30冊以上に達し、主な成果は、「総観気象



学」、「動気候学」、「応用気象論」、「長期予報」などのタイトルで岩波書岩から出版された。

1949年、先生には不向きな人員整理をしたあと、予報現場から予報研究部にうつられた。専ら長期予報の研究に没頭され、大規模な大気変動に存在する周期性に注目された。最近の長期予報技術にも利用されているが、シベリア高気圧や太平洋高気圧の35~65日の周期的変動に注目された。最近の研究テーマである熱帯対流の季節内変動は、すでに先生の頭にはあったと思われる。

先生は、その後、予報研究部長、札幌管区気象台長、予報部長、気象庁長官を歴任されたが、札幌時代は部下を連れて夜は薄野の探訪を楽しまれ、また、宇田先生の指導で俳句を始められた。宴会があると、即興で割箸入れの紙に俳句を作り、嬉しそうに披露された姿は忘れられない。御遺族によると、寺田寅彦に一步でも近づきかけた気持からだという。これらを集めた「俳諧お天気日記」は奥様が亡くなられた秋に自費出版され「身に沁みる妻なき後の秋の風」と付記された。

退官されてからの先生は筑波大学で吉野前教授と共に「気候変化と食糧問題」の国際シンポジウムを開催し、戦後の荒廃した国土を気象災害から守るため台風や豪雨を研究し、損害保険料率算定会災害科学研究会委員長を務められ、「気象災害論」を刊行した。また、地球環境の研究を進め「生存の限界」や「21世紀の地球環境」などを出版された。さらに、(勲)日本気象協会副会長、気象審議会委員など数多くの会長も務められた。